

三河アララギ

平成二十九年

2017年

四月号

第六十四卷 第四号



ニューヨーク日記(126) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NIKKO TÔSHÔGŪ

Blue Shoe Diaries



年明けに日光に行ってみた。日本では何でも小さくってコンパクトな感じがするけど神様の家は盛大よね。長い長い間生きている背のとても高い木に囲まれて、見上げるのが気持ちいい。空気もきれ〜!あとはやっぱり階段も沢山あって運動も出来ちゃう。東照宮のデザインが面白く思えた。何だかインドや中国っぽい色のコンビネーション。アジアだね。2017年こんにちは。

A mini trip to go say hello to God in Nikko, Japan. In general, everything in Japan tends to feel small and compact but it greatly differs when it comes to God's home (shrines). It's grand and spacious. Surrounded by tall tall trees that have been around for so long. It feels good to look up and feel it's grandioseness. The Toshogu Shrine (UNESCO) is impressive but also curious. The design and colors felt like they were influences from India and China. Brighter contrasts and gold. I guess it makes sense. Hello 2017.

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

はるばるとゆきて届きし味噌の香よドン・ボスコの十階の部屋

のうぜんの花おちやすき窓の辺のわれの午睡に夢あらはれず

おしろいの午後の三時に咲くこともはやくはるけし感恩の母

ながらへてありつつ汗をふきふきてわれの記憶の履歴かきつく

朝顔は多年草にはあらざれば父なきのちはおもかげとする

わが机のうしろとほりて声かけて妻が豆腐を買ひにいでゆく

たちまちにまた待つ日ありけふの日のよろこびは耀く朱の佛桑華

味噌汁をひとつ尊びしこと思へば母のよはひにわれは近づく

老いふたり生きゐるたのし誰れ彼れかつぎて持ちくるものを食ひつつ

秋に入る朝明の雷は海の上を来りて海にしずまりゆきぬ

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

幼き日茅花を抜きて食ひし道除草剤の袋踏むばかりなり

「スモンの会の姿勢を正す会」の会報が来りて梅雨あがる雷の轟く
スモン病みつつ勤め続けてこの年も夏のボーナスをいただきにけり
空欄の埋まれば辞むる日の来たる押印なかばわが出勤簿

コトコトと鍋にハト麦のおどるらし音して香ぐはし匂ひしはじむ
夏期休暇とりて一日を臥してゐむ鳳来寺百合の匂へる室に

蒲団干し金魚も買ひて日曜日楽しかりけり夕茜する

起きいでて五十分あまり経ちしころ病むわが足の歩み馴れゆく
いくたびも眼鏡外して球を拭くめがねの球の曇るでもなく
書くことも読むこともみなあきらめて只々横になりて眠らむ

歌集「草々」

今泉米子

ちらちらの大文字草の白き花降らざりし梅雨の夕ぐれの風

この四五日やさしきこゑに囀りし雛燕ひなつばくろの今日は聞こえず

梅雨時の薄ら日のさす川原に胡桃なびけり最上川なり

最上川となりたるところ広々と川原あかるきは河原母子かはらははこか

最上川の広き川原を耕してみどりも深きオカヒジキ植う

境内の梅雨じめる土の清らかに色づきそめし小梅散りばふ

おきな草ほほけて翁となれるところ導かれ来て立ちゐたりけり

朝露の紅つめくさ川堤のぼりて最上に別れむとする

梅雨雲の幾重の奥の蔵王嶺にむかひて坐る夕ぐるるまで

山城屋二階の目覚めはやくして月岡城址の郭公のこゑ

歌集「はゝきくさ」I

河原静誠

枕辺の牛乳びんの八重桜葉桜となりてなほも臥しをり

退院の荷をまとめ終へ長き月日横たはり居しベッドに見入る

紅のさつきの薬育てむと朽ちゆく親木の根元に結ぶ

梅雨にぬれ芋挿しいそぐ媼あり声を交はさず畑道をすぐ

園庭にまるく石にてかこみたるは古き御堂の須弥壇の跡

詠唱検定に臨みし吾は未だなほ声の弱きを減点されぬ

五年前みまかりし伯母の縫ひませし室町袋を日毎用ふる

御仏に供ふる芙蓉剪らむとて雨の音する朝疾く起きぬ

車前草と枸杞と十薬摘み集め土用丑の朝陰干しに

わが居間に日毎用ふるお師僧の遺品の花莫莖色あせてきぬ

白き手袋

蒲郡 岡本八千代

名づけたるわが木槿庵^{ムクゲ}に今日も来てひとり時の淡々^{あはあは}として

二人ゐて一人の如くにある時は浩^{くら}しつつ冬の過ぎてゆくかな

「考えることの好きなお雛様」のわれの描^{えが}きし色紙を飾る

訪ね来しわが教へ子に復刻書^{ぼくせつろく}「木屑録」見せる白き手袋して

復刻書「木屑録」の文卷^{ふまき}の色藍のその上わが白き手袋

寒の水ごくりごくりと吞む吾を誰も見てをらずこのうまさかな

寒の水神に供へて豆まきもせずにすぎたり今年の節分

すすしろの太き一本をもらひたり提げたればわれよろめきにつつ

大根の太きま白に夕べの日あたりて光るほのくれなるに

子規のこと書かむとすれば漱石のこと書くことになりつつこの夜半

地蔵菩薩

東京 今泉 由利

妙高の林檎スライスジャムにして朝な朝なに蘇ること

江戸彼岸・大島桜・山桜・染井吉野のDNAよ

太陽のスーパーフレアと窒素分子と地球に始まる命の初め

角材をひと彫りひと彫り彫りつづく五百の日日の過ぎゆきにけり

命あるすべての救済願ひつつ彫り続けこし檜角材

仏頭も仏手仏足御姿の伝はりてこし伝はりてゆく

山なせる木屑のなかに埋もれて今し迎ふる地蔵尊菩薩

ひと彫りをひと彫りごとを重ねこし今しまみゆる地蔵尊菩薩

千年の時の過ぎをり善円作地蔵菩薩の近く寄りゆく

千年の昔の人と同じ同じ地蔵菩薩を彫りあげにけり

三河木綿

豊川 弓谷 久子

父の撒く追儼の豆をはしやぎつつ拾ひき我と妹と

お手玉を母が作りてくれたりき大豆の音のしやりしやりと

古里の訛なつかしと歌ひたる啄木思ふ冴え返る朝

月一度健康診断今月も異常無ければ心も軽し

移転して主治医は遠くなりたれどのんびり帰らむ野中の道を

自転車を下りて眺むる御堂山空にくつきり峰のとがりよ

咲き残る枯野の中の野水仙この農道に逢う人も無し

三河木綿の手提袋を縫ひてをり素朴な縞柄楽しみながら

雫形の袋縫ひをり納得のゆくまで幾つでも縫はむ

昔気質の父にてありき逝きし日の如月の尽又近づきて来ぬ

にんにく

豊川 内藤 志げ

西風に蕪はころころ吹きさらし罅^{ひび}われの蕪馬穴に一杯

酔いしごと竹と竹とが右左温き日射しの正月の尽

門隅の猩猩楓に光る玉さみしき庭に花なす雨粒

窓の外いつしか風の止みてをりトンネル張りを夫にたのみぬ

大根も白菜キャベツも重すぎる採りて行けよと道に立ちをり

時おりに雪の舞ふ日も日向の径行きつ戻りつ一人たのしむ

生姜湯を薄く溶かしぬふうふうと吹きつつする一人の部屋に

枯れ芝にツムギが蚯蚓を捕へたり右を左を見つつ食みをり

にんにくに大と小との種がある息子が植ゑたりわれは知りたり

鎌を手に強く根を張る草を引くおおニンニクの香りの中に

ふる里の雑歌

岡崎 林伊佐子

杉森に見え隠れたる電柱が住まざる里の集落つなぐ

村人も都会に町に離村して杉森となる時代の変遷

帰省して雨戸閉ざせる家々に助けあいたる友をしのびぬ

帰省して山坂のぼる山道を今も守りて道祖神の立つ

育てゆく玉葱の畝間のホトケノザ花咲き群れて命を保つ

畑を打つ後につきくる黄鶺鴒がわれには見えぬ地虫を食べる

稗圃い取りたる朝の牡丹の木自由になりて枝の広がる

土割りて赤き芽をだす芍薬を踏まれぬように紐を張りたり

キャベツ葉の蝶の幼虫の生命を思いて殺さぬ老いたる吾は

百本のいちごの苗に鶏糞を施し育てる双子のひ孫に

合格欄

豊川 安藤 和代

テレビ見る夫の笑い声聞こえて心も軽く大根きざむ

雪の中センター試験に向う孫生くる試練と庭に見送る

雪だるま二個ならびいる公園は人影もなく雪降りつづく

雪晴れてままごとの様靴二足干されある庭ほのぼのとあり

スペイン語勉強したいと外孫の通学四時間に頑張りをみる

爺ちゃんの一字もらった孫の名が合格欄に堂々とあり

北風が高圧線をうならせる真昼を犬はまるまりて寝る

恵方巻黙して食す家族等の一人が笑えば皆笑いだす

キッチン隅に置きたる馬鈴薯に小さき芽ツンツン今日は立春

髪を切り耳にやさしき春の風梅の蕾に声かけてゆく

武者隠し

春日井 清澤 範子

低気圧高気圧入り替わりして庭の椿はほころび始む

昨夜から予報どをりの雪となり車静かに走り去る音

リハビリの散歩に寒しエアコンの部屋にてラジオ体操などする

八王子神社はサッパリと剪定され境内に砂利が敷きつめられぬ

暑くとも寒くともあれ予報士の報ずる暦は着実に春に

シャコバサボテンの紅々の花咲き揃ひピアノの調律の日取りを決めぬ

ガラス戸に額をつけて庭なかの椿の赤き膨らみ見つむ

眠るまで今日の出来事思ひをり柱時計の音と夫の寝息と

武者隠し付くる座敷の右端に机を置きて原稿を書く

三日程雨続きたり久々に冬空澄みて綿雲の浮く

国

大阪 伊藤 忠男

命すら選択できるDNA何を是にし何を否にする

今世界相互依存に支えられ一国ファースト成り立たずなり

通じぬか商人家訓三方良し売り手に買い手世間良しなり

今朝もまた眠り覚さるツイッターたった5行で慌てふためく

孤立する恐さひしひし1ヶ月心交わる友欲しき時

ゴルフとて取り引きの場と心得よ氣が抜けられぬナイスショットも

今何が今後どうなるフロリダの一打一打に一喜一憂

教育の機会均等ありてこそ国を守りて国栄えたる

人は皆人らしくが人なりやそれとて邪魔と切り捨てる人

いつの日か人の生活様変りAIロボット住み分ける日が

富士嵐

沼津 鈴木孝雄

高山線雪の飛驒川右左ディーゼルの音旅情そそる

大寒に奥飛驒温泉露天風呂菅笠被り降る雪凌ぐ

富士嵐の風は未だに冬なれど光の海は春を告げつつ

立春の光を浴びて河津桜急に花増しはやも二分咲き

盛り上がる土に一步を踏み入るやザクと音立て碎ける霜柱

穴空きの小松菜穫っておひたしに虫は美味かる我も相伴

エンドウの新芽までもが鳥害に山の食糧さぞ深刻に

検査終えベッドに戻って寝る妻はホッとしたのかかすかにいびき

西林寺妻の手術の無事祈る梅と蠟梅の花心強し

摘出の胆嚢からは石5つ想像絶する造粒技術

嘶家

東京 森岡陽子

墓参りみつきが過ぎて行きて見る並ぶ隣りの墓が更地に

嘶家は四百年の歴史有り認知症なし威張り言い切る

寢室の天窓にやうやく戻りくる暗かった部屋月光射し込む

紅梅は冷い冷い風に咲く夜の薫りも冷い風に

野鳥達にどこが違うか万両の隣家は残り我ヶ家は実なし

去年今年花の季節の移りきて河津桜の花開き出す

北斎とひよいと会えそな向島桜餅食ぶ隅田川ほとり

山間にふくらむ蕾覗き見るこの木瓜あの木瓜咲くは何色

祈り込む重る絵馬は風に揺れガチャガチャガチャ応援の音

苔生した古刹の裏門静かなり白梅かをり椿咲き出す

完治

東京 足立晴代

節分に鬼はメ出し福の神奥へ誘いいざなそれ恵方巻

小寒と春の陽ざしにまごまごと着替えるひまも忙しきかな

冬の風西から北へ吹き抜けて吾が家の玄関春を待つなり

如月も走り去り行き桃の花咲きて弥生の雛祭りかな

ひらくと雲舞う中にありやなしやとまたたく眼あり

碧き空怪し黒雲何時動く流れは早く変りゆくなり

日々感謝何事なきをよろこびて幸迎え過ぐる時をと

折れたる腕も完治せり医師の言葉は千金の値今後の自重吾の責任

九十で入れ歯直してあと五年頑張りますと吾は思うなり

仲々に流れあるうた浮かばずにますいの後の後遺症かと

春一番

横浜 阿部 淑子

高温を運ぶ強風春一番連なる客はかき氷店

マスク付け顔になじませ家を出る花粉症対策いつまで続く

プレミアムフライデー始まりて如何に過すか余暇のひと時

朝日を背に歩む我が身の影法師スラット足長カールの髪の毛

声援を力に希望を膨らませ東京マラソン三万人余_よ

蜜柑

豊川 白井 信昭

柔らかな日差しを浴び隣畑梅咲き始む香りたつ二月

開通の早く待たるる『音羽川』回り道して椎木橋渡る

コンテナに相樂の蜜柑は早生にして混ざる中にも甘きがありぬ

ラグーナに蒲郡発の銘柄の蜜柑ワインを先ず一本買う

東大塚長興寺跡悉く太き幹棚三つともども拔根されおり

直線に厚く高き壁築かれて宅地造成の区画整理

ぬばたまの夜の更けゆけばしんと降り立つ窓に雪は降りいる

一日を遍ねく降らせし大雪も峠は越して夜明けの小降り

雪は止み今日ばかりは自らわが運転の徐行速度に

ひもすがら西風吹^{まぜ}き荒れて東^{ひんがし}に澄み昇りたる今宵満月

如月の痛み

名古屋 近藤 映子

如月の入りて連日寒き朝右手ばかりか右足の痛む

如月はまだ寒い冬日の続く朝布袋を抜け出す勇氣よ

パソコンのトランプゲーム始めればたちまち一時間の夜の時過ぎぬ

如月の見降す川に鴨のむれ流れ逆いて泳ぎ遊びぬ

如月の見降す川面の水鳥五六羽は暫く遊び飛び立ちぬ

検診日主治医に右手のしびれ痛みを告げれはうなずくばかり

痛み止一日二回を三回飲んでもいいよ主治医は

テレビにて梅林風景現われれば元気な夫を思い出し

我右手の痛み暑い寒い季節の性ならず我脳神経の性なれば

見降しの水鳥川面に気持良げに水に何度も顔を入れ居り

ブリスベン

蒲郡 杉浦恵美子

係員に訊きつつ進める申告のパソコン操作も五度目となりぬ

年一度見るだけなれどその文字にちくりとしたり寡婦控除欄

五番目の赤子見るため訪ね来ぬブリスベンは気怠き真夏

ブルーとも緑ともつかぬ五組の眼瞬きもせず我をみつめる

ご馳走はいらない常と同じでよくして毎食アボカドサンド

何処から守宮の鳴き声聞え来るブリスベンの夏暮れ泥みたり

四人もの男児すぐに取っ組み合い嗚呼この家庭まさに生きてる

一日中泣いたり叫んだり我が頭に靴が降って来る活気が嬉しい

家族にはあらねど縁ある子供達どの子の個性も生い先ゆかし

次はまた何時かこの子等含羞の少年少女になりているらむ

報恩講

豊川 山口千恵子

陽の射し込む本堂の隅に座りたり報恩講の寺に参りて

知らぬ間に咲きて散りたる山茶花の吹き寄せられし紅の花びら

春近しと思へるほどの今日の風観音寺の大楠の葉光りてさやぐ

芽出でたるジャガイモの種切り分くる春を思はす朝の陽の中

つやつやと彼岸花の葉繁りつつ事なく過ぎし一日の尽

枝にさすみかん目当ての小鳥たち今日は目白三羽また四羽

暖かき午後の一とき草を掻く冬草青々木々の根本に

石垣の間に今年もクロッカス数の殖えつつ芽生えておりぬ

折鶴蘭雪に埋もれて枯れはてし春には青く芽吹きくるらむ

開かれし農業祭のクジ引きに卵一パック当たりて楽し

土への思い

豊川 夏目勝弘

土の道を歩むことの少なくなりぬ三輪山登拝のぬかるみ懐かし

朝朝を歩む田中の山沿ひの山の細きも簡易舗装ぞ

霜柱を踏み砕く音なつかしし舗装の道をただ歩みゆく

庭土が黒土なるは何故と今まで一度も思ひしことなし

縄文の人びと住みしここ台地に我も同じく住みてきにけり

里山の山道上れば赤土の台地広がる墓地へと続く

唐鋤を振ひ拓きし赤土の台地は肥沃な畑土となる

赤土を僅かに盛り上げマツタケは土のなかにて傘ひらきぬき

埋葬地は赤土なりけり埋葬者の穴を掘りしも幾度なりき

父母の永久の眠りの土布団その赤色も失せて久しき

歌集「夢のつづき」

水上 信子

美しき風紋描き過去を消す砂漠の下に栄華の夢あり

落日のつよき光に顔をそめ砂丘に立ちて今日を見送る

地の果てにオレンジ色の落日を見守る人の影長々し

天を向く直立不動の枝々にポプラの花の白く光れる

再びは訪ぬることのなきこの地地平に空に思い深まる

石礫のなか三日走れば夜の夢にUFOも飛ぶ面白大地

いつくもの手に身をゆだねまどろみぬ快きかな美容院の午後

夜を走るMAXときの二階席街の灯遠く広がるが見ゆ

街の灯のしだいに空へ立ち上がり夜の列車は都会へ入る

車窓より眺めつつ来し満月が駅に降り立つわれを迎うる

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

元旦に届きし賀状一番上叔父から届く達筆なる賀状

「西浦へは行けなくなった」繰り返す叔父は伝へ来在所のわが家へ

牧原正枝

初日の出島の端より登りくる集まり来たる皆と^{おろが}拝む

一升の餅背負ひたる曾孫は歩めずついに坐りてしまひぬ

石田文子

久しぶりに一面ま白なこの朝またもはらはら粉雪降りくる

五センチも雪積もりたる今朝なれば隣家の庭に早や雪だるま

森厚子

孫次郎の「オモカゲ」の前立ちつくすあはき光につつまれてを^{りようおう}り

孫次郎の「オモカゲ」の前立ちつくすあはき光につつまれてをり

山崎俊子

川の音聞きつつひとり渡り来てふりかへり見る雪の渡月橋

寒椿の下枝に咲きしひと花の紅ひとつそりと雪の降る朝^{しづえ}

三田美奈子

半島の人の御魂は鉄路の下日本の土と成れるも哀し
年越しの休みは了りぬ賑々し声の戻りてこれまた楽し

水野 絹子

わが作りし野菜届けむと雪の朝妹の家へ一人歩めり

わが池の金魚狙ひし鷺の来てああざやかなりし姿いまなし

牧原 規恵

頂きしひと枝の蠟梅厨べの窓辺に飾りて春を待ちをり

われに余命告げし貴女は今朝逝けり昨夜の雪はまだ降り止まず

稲吉 友江

息子らの遊びしケン玉捨てられず紐切れしまま又しまひ置く

古希迎へ夫は言ふなり息子らのかの誕生こそがわが宝物

鈴木美耶子

友よりの賀状に一言「^{こん}楽しむに心掛けたい」とメッセージあり

小正月と交はす一献に窓には粉雪雪見酒かな

吉見 幸子

現代学生百人一首

東洋大学

大晦日寂しい寮で思い出す母の手料理幸せの味

愛知県淑徳大学留学生別科

茹^{じょ}

臻^{しん}

君^{くん}

「またきてね」言ってもらったあのコトバ神戸と東北絶えない絆

神戸市立葺合高等学校二年

橘^{たちばな}

優^{ゆう}

佳^か

あの父が初めてくれたおこづかい「また来るわな」のひとことそえて

天理教校学園高等学校一年

佐^さ

波^{なみ}

貴^{たか}

恵^え

艇友と夢に向かってオール漕ぎ今日も川面がキラキラ光る

岡山県立岡山東商業高等学校三年

柿^{かき}

本^{もと}

杵^{えり}

菜^な

伝えたい原爆の持つ恐ろしさ祖父に代わって次の世代へ

広島市立舟入高等学校一年 江草清花^{えくさきよか}

瞳閉じ両手合わせて御霊らの声を聞いている八月六日

広島市立舟入高等学校一年 保本祐希^{やすもとゆうき}

ものづくりひとつひとつの工程に思いを込めて機械を動かす

広島県立宮島工業高等学校三年 中野竜嘉^{なかのりゅうか}

また一つ小さくなった祖母の背に長生きしてねとつぶやいてみる

広島県立広島工業高等学校三年 野坂慎太郎

私の一首

人參を選びゐるわれに話しくる手元が狂うとただ黙々

内藤 志げ

「人參をLMSに分けてゐる手元が狂うとただ黙々と」と単純化すべきだったか。七十歳を過ぎた頃まだ働く事が出来ました。

働ける事のたのしさを自分の思ひをアララギに残す事が出来ました事もみなく様ののおかげと感謝でございます。

向かふ丘の傾斜の縁の垂れサツキツツジ伐られてありぬ

白井 信昭

丘の麓J R三河大塚駅近く沿道のひと処。急斜面の縁に毎年、ゴールデンウィークを彩るサツキツツジが満開に咲き、その長い枝を垂れて風に揺れる風情でしたが、去年惜しくも伐られてしまい寂しい。

初午の稲荷神社の祭り日に向島辺り狐出迎ふ

森岡陽子

まだ残る公園の雪吊りの横では白梅紅梅が満開。

長命寺の桜餅で一服した後、三囲^{みめぐり}神社（三囲稲荷）に寄る。俳人其角が雨乞いに詠んだ「此御神に雨乞する人にかはりて游（ゆ）ふだ地（ち）や田を見めぐりの神ならは 晋其角」「早稲酒や狐呼びだす姥が許、其角」と碑が立ち、本堂の囲りには小さな祠の稲荷神社が五ヶ所、トライアングルに組まれた石の鳥居も、珍しい面白い稲荷神社が有ったのでした。

童謡 「つくしのぼうや」

高橋育郎 作詩

つくしのぼうやは かわいいな

あおいお空を みあげてる

ぼくはすぎなに なるんだと

はるにせおびを しているね

つくしのよぶこえ きこえるよ

いつてみたいな 川のどて

スキップしてるこ てをふれば

つくしもおかおを ふっている

風はうたうよ たのしいね

やさしくハミング しているよ

ぼくらもなかよく うたおうよ

つくしといっしょに うたおうよ

つくしは土の ふでなんだ

お空になにを かきたいの

うれしいことを かきたいな

いろんなことを かきたいな

「歴代天皇御製歌」(七十二)

貫名海屋資料館

「靈元天皇」第百十二代・在位一六六二年(十歳)・一六八七年(二十四歳)

靈元天皇は、第百八代・後水尾天皇の第十八皇子。在位中、父・後水尾上皇の院政の時期にあたり、靈元天皇お一人での親政は、終りの八年間のみ。

靈元院が詠まれた和歌の総数は、六〇〇〇余首。山鹿素行。僧契冲。荷田春満の登場してくる時期にあたる。

朝なく神の御前にひく鈴のおのづから澄むこゝろをぞ思ふ

寄神祝(寛文十二年 十九歳)

あめつちの神のこゝろをつたへきて今も八雲の道はたゞしき 八雲の道Ⅱ和歌の道

書をだに夜も見よとやつれぐの窓降りうづむ雪のひかりは 閑居雪

語りつぎ言ひつぐことは難き世の昔もふみにむかひてぞ知る 披書知昔

萬代のことがなかにも言の葉のみちこそ國のはじめなりけれ 寄道慶賀

『俳句』

早梅や小さき鳥の来て去りぬ

田中清秀

舟べりをたたく水音猫柳

下萌や啄み止めぬ鳩の群

自転車を薙ぎ倒しゆく春一番

重野善恵

受験期や神も仏も在すらし

猫柳摘みてままごと遊びし日

早春をうらうらとゆく一万歩

今泉由利

放たれし種のひとつか黄たんぽぽ

一番も二番も吹きぬ春三番

海苔粗朶や月の小舟の揺れもせで

松 本周 二

夢見なるものや日向の猫柳

明るむや日陰に育つ露の臺

岸に着きあげるオールや猫柳

米 田 文 彦

足止めて垣内のぞく梅見かな

母と子と春の三河の遊歩道

ぶらんこを揺らして老の重さかな

柳 田 皓 一

油断してジャンパー欲しき余寒かな

レストランの奥に活けらる猫柳

啓蟄の土掘り起こすシヨベルカー

山元正規

東雲の落き明りや涅槃空

せせらぎの水音やさしく猫柳

鳶職の声の軽やか春うらら

森岡陽子

梅が香や檀家迎へる仁王門

紅梅の花満つる夕雨模様

立春大吉王子句会かな

植村公女

かたまつて正ちゃん帽の淑気かな

綻びし無人の家の寒椿

「一茶名句集」(大正十一年二月廿五日発行)

ぶら／＼と歩きでのある日永かな

日が永い／＼とのらりくらりかな

長閑さや垣間を覗く山の僧

ゆさ／＼と春が行そよ野辺の草

我里はどう霞んでもいびつなり

ほんがりと麴の花や春の雨

花のところへ雪のふる涅槃哉

おらが世やそこらの草も餅になる

かさね吟行会

「豪徳寺と松陰神社」 二月

米田文彦

二月十日金曜日、寒気厳しい日の吟行となった。山陰・北陸から東北・北海道まで、日本海側は大雪が続いており、東京も雨の心配がある朝となった。

今回は世田谷の豪徳寺門前に十一時集合、それぞれ自由に散策とする。この寺は幕末の大老・井伊直弼をはじめ井伊家の墓所となっているのだが、招き猫の寺としても名高く、次のような言い伝えがある。

昔は貧しい寺だったが和尚は猫を愛していた。或る日鷹狩帰りの武士数名が寺内に来て、「門前にいる猫がしきりに我等を見て手をあげ招く。あまりに不審なので暫くここで休息させよ」としている間に夕立が降り雷鳴が鳴り出した。和尚も説法などを行い武士は喜んで帰って行ったが、この武士が井伊家の当主であり、以後、豪徳寺に厚く帰依した、というものだ。

寺の案内文には招福猫兎と書いて、まねきねこ」と振

り仮名している。

山門から真直ぐの参道には高い松が並び、本堂前には白梅、右手には紅梅が美しい。

厳しい寒さの中、春を探し、春の季語を考えて歩く。寺域には白木造りの、つまり彩色された形跡はない、立派な三重塔が立つ。良く見ると飾りとなっている彫り物の中に猫がいる。「あくまでも猫なんだね」などと無駄口を叩きながら行く。

ある所には奉納された大小様々の、たくさん招き猫が置かれ並べられている。小さいのは窓の棧の下に置かれたりしている。皆おなじ顔形と手をあげる姿で大きさが様々、ロシアの人形のマトリョーシカ、人形の中から人形が出てくる、また出てくる、というのを連想したりする。

白梅の香りゆかしき豪徳寺

善恵

梅東風や皆右手あげ招き猫

さち子

強東風や風鐸の鳴る三重塔

京子

寶銭は小窓からよと椿咲く

皓一

さかしまに千社札貼る余寒寺

正規

白梅や仏に清き昨夜の雨

周二

次の行程地、松陰神社に向かう。路面電車と言ってもいい世田谷線に乗って三つ目である。

ここは幕末の志士・吉田松陰の墓所なのだが、松陰の墓は生地・山口県萩市にもある。世田谷は毛利家別邸のあった地であり、松陰が安政の大獄によって処刑されたのち、東京小塚原の回向院にあった墓を門下生の高杉晋作、伊藤博文らがここに改葬し、社を築いて松陰の霊を祀ったものである。

松陰は処刑されたとき三十才であった。

安政の大獄を指揮したのは大老井伊直弼、世田谷の電車三駅という近くにお互い眠るというのも歴史の皮肉と言ってよいのだろうか。

松下村塾を模した建物もあり、覗き込んでみるが閉められている。ここも白梅が美しい。

墓域に入ってみたが特になにもない。春はもう少し先のようなだ。

本堂の中では何かを祈願する家族のために神主が祝詞をあげていた。境内には若い女性グループも散策している。

志士の墓一花もなく冴返る
素山
師を仰ぎ並ぶ灯籠春寒し
陽子
青年の神主の声春浅し
文彦
神の酒少しいただく春うらら
由利

句会場は世田谷区役所の地下にある食堂であり、昼食後そのまま二時間ほど居続けで行う。このように都合の良い会場を設定してくれた幹事役の方に感謝の言葉で句会は始まった。

■かさね吟行会■

日時 四月十四日（金）

場所 五島美術館

集合 上野毛駅（大井町線）

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（六〇）

丸山 酔宵子

『沈黙（サイレンス）』

巨匠マーティン・スコセッシ監督が28年の歳月を経て完成した遠藤周作原作「沈黙（サイレンス）」がいよいよロードショウされた。世界20ヶ国以上で翻訳され、「第三の男」イギリス作家グレアム・グリーンに絶賛され、ノーベル賞にも推挙された名作の映画化である

超大型スクリーンには薄い雲に覆われた空が映し出され、遠くから聞こえる海とわずかな自然界の音のみ。はるか彼方から拷問を受けるキリシタンの呻き声がかすかに聞こえてくるようで、重々しい3時間に及ぶ超大作のスタートである。

江戸初期の長崎。激しいキリシタン弾圧の中で棄教したとされるフェレイラ神父の真実を確かめるため、日本にたどり着いたポルトガルの若きイエズス会士ロドリゴとガルベ。その目に映ったのは想像を絶する弾圧の中で

の貧しいキリシタンたちの苦悩と惨状。ロドリゴはガルベと別れ、ひとり五島列島をさ迷い朦朧とする中、転びキリシタンのキチジロー（窪塚洋介 好演）に長崎奉行所に密告される。井上筑後守（イッセー尾形 大好演アカデミー賞助演賞候補？）は日本の大地からキリスト教を根絶するため、最後のパードレであるロドリゴに対し、非情で冷酷ならゆる手を尽くして棄教を迫る。踏み絵をしてもなお残酷な拷問にあう信徒達を目のあたりにして、何故神は沈黙するのかと嘆き、追い詰められ、遂に棄教に至るのであるが・・・。

シーンと静まり返った満席の館内後部座席から、堪え切れぬ声が漏れるほど、確かに緊張と重圧を強いられる。しかし、ラストでロドリゴが日本名岡田三右衛門として命を終えるが、掌の中にあるのは小さな小さな素朴な擦り切れた十字架らしきものが握られているシーンがそつと映し出される。

「主よ、あなたは何故、黙ったままなのですか：」「いや、私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのだ」

【閑話休題】

ところで、キリスト復活の記念であるミサには、パンと葡萄酒が欠かせないが、あの時代、果たして葡萄酒は何処から……。フランシスコ・ザビエルが日本に布教を始めたころは、葡萄酒を信長や秀吉に献上の記録があり、持参したと推測するが……。

・・・・・・・・・・・・・・・・

キリシタン弾圧後は、隠れキリシタンたちは独特な方法で、ミサを行っていたようだ。昨年長崎に行き、大浦天主堂や26聖人教会の隠れキリシタンの資料や秘蔵映像を見たが、クリスマスミサや復活祭でのパンと葡萄の代わりに、炊いたお米とどぶろく風の日本酒をにぎにぎしく捧げ、御詠歌の様なリズムで祈りを察させているのである。

明治維新前、1864年当時まだ禁教令下であったが、フランス人のために大浦天主堂が完成。当時「フランス寺」と呼ばれていた天主堂に浦上の隠れキリシタンたちがやって来て、聖堂内で祈るプティジャン神父に近づき、

「ワタシノムネ、アナタトオナジ」とささやいて「サンタ・マリアの御像はどこ？」と尋ねたのである。

秀吉とそれに続く徳川幕府のキリスト教禁教令、そしてついには1639年の鎖国令により、宣教師達は追放され、以来将に『沈黙の250年』。表面は仏教徒を装いながら、内にはキリストへの熱い信仰をもって、代々伝え聞いた信仰を守りとおしてきた「隠れキリシタン」は世界のキリスト教史の中でも類を見ない感動的な奇跡であったのである。

早咲きの椿が匂う天主堂

酔宵子

本からのあれこれ(17)

米田 文彦

「へそ曲がり、偏屈、よく言えば個性」

今年是小説家・藤沢周平が亡くなって二十年、命日一月二十六日は「寒梅忌」という。

作家・中野孝治は評論の中で以下のように言う。

「藤沢周平の時代小説が好きでその全部を読んだ。何処が好ましいかというところ、

○文章のよろしさ・・・端正でメリハリのきいた快感

○登場人物の人間性・・・ふつうの人間である。

○剣の立合いの描写のみごとさ・・・描写は具体的、精妙かつ端正で大人の読むに耐える叙述、

○友情・・・友情のあつさを描いて天下一品、

○自然描写のよさ・・・最も自然描写に巧み、四季折々の山や川や町や野やの美しさ、

○人間のよろしさ・・・主人公たち人物の魅力的なこと、

○食いものの描写のよさ ○女の姿と心のよさ・・・」。

そして、「彼の小説は必ず人間の心の動きの急所を鮮やかに描いて読むものを捕らえる。」という。

私も藤沢周平はほとんどを読んだと思うが、その中の極端に個性的な主人公たちを想起してみたい。

ちなみに、個性的という意味では「隠し剣弧影抄」「隠し剣秋風抄」という有名なシリーズがあり、他に類を見ない剣法を使う剣客たち、懸命に生きる剣客たちを描いている。この剣法が荒唐無稽ではないか、ありうるものかを検討するために、書斎で実際に剣の型を取りつつ筆を進めたという話がある位に独特で面白い。

世に小説はたくさんあり、そのほとんどは個性的な主人公を魅力的に描いている。その中で藤沢周平はいろいろなキャラクターを数多く見せてくれていて拔群と思う。

短編集「たそがれ清兵衛」に出てくる他の主人公たちの名前は、うらなり与右衛門、ごますり甚内、ど忘れ万六、だんまり弥助、かが泣き半平、日和見与次郎、祝い人助八、という。剣の達人ではあるがそれは昔のことと忘れられている、突然腕を振るうことを余儀なくされるのだが、その褒賞はごく些細な個人的なこと、という筋になる。

「へそ曲がり新左」では、新左衛門ほど人に憎まれて
いる人物はいない、という書き出しに始まり、終わりは
焚火にあたっていて「(良い話になって)良かったですな」
と声を掛けられても「むむ」と渋面を作るだけ、火が消
え闇に包まれてから不意ににやりと笑った、という人物
である。

先日の新聞コラムに将棋の加藤一二三九段のことを書
いていた。「当時最年少の十四才でプロ入り、神武以来
の天才、数々の個性的伝説。そして、昔のアンケートの
問いと答え。「無人島に一つだけ持って行くとすれば貴
方は何を持って行きますか?」愛読書、ギター、写真、
答えは人それぞれだろうが、加藤九段の答えは「羽生さ
ん」。羽生善治三冠を連れて行って将棋三昧ということ
らしい。無人島に差し向かいに座って困惑顔の羽生名人
を想像すると可笑しい。」

その加藤九段も老年となり負けて引退も決まり、最近
は「ヒフミン」と人柄を愛されているらしい。

へそ曲がり、意固地、独りよがり。

これらは、その人の身近で付き合う人には迷惑この上

もない性質、というのはよく解かる。そして思う。個性
的すぎる人というのは結構どこにでもいるのではないだ
ろうか?

実は、弓道で付き合いのある人々の中にもいるのです。
一人だけでできるスポーツ、内省的ともいえる弓道は格
好の世界なのかもしれない。そういう独特の人は得てし
て実力はあるものなのだ。無ければ誰からも相手にされ
はしない。

一般的には「へそ曲がり」。これは少し離れた立ち位
置から見ると、実は独自のものを持っていて案外に個性
的で魅力的なキャラクター、ということになるのではな
いのだろうか?

そして、年寄りになるほどひどくなる、とまでは言わ
なくても、みんなその要素を持つているのかもしれない。
「自分もそう見られているのかもな、そうならば、せい
ぜい隠しておかなくてはまずいかな?」と、臆病な私は
考えてしまうのだ。

ある自然科学者の手記(59) 大橋望彦

『生・若・老・死』

7)「組織培養の技術を予研病理部の山田正篤先生に教わる。」

HaLa細胞の培養から始まり、ハムスターの組織を初期培養する方法、更にHeLa細胞の懸濁培養(suspension culture)の技術、等数々の技術を丁寧に教えてくださった。先生は後に、東大の薬学部教授、薬学部長を経て、名誉教授になられたが、癌研には頻繁にこれ、いつも楽しく色々な話を聞かせてくださり、また、気安く、小生の意見を聞かせてくれ、と言って呑みにも誘ってくださった。また、植物に大変造詣が深く、三冊の本を書いておられ、その中で、巨樹にも興味があるということ、奥多摩にも何回か来ておられる。二度ほど奥様と同伴で我が家にも泊まりに見えて、夜遅くまで呑みながらお話をしたのが懐かしい。しかし、先頃突然、先生は癌に罹患され他界されてしまわれた。実に残念である。

8)「アイソザイムの研究」

小野哲生先生がアメリカから帰国してこれたが、そのとき大塚の癌研は大改編の後であった。

9)「ウイルス学の基礎知識を東大医科研の山本正教授に教わり、セミナーに出させて頂く」

ダモン・ラニオン米国癌研究振興基金財団より、米国留学のための全額(旅費ならびに2カ年間の滞在費)支給が決まったので、色々準備が必要となった。

「McArdle 癌研究所時代」(S42・111S44・1・20)

10)「米国ダモン・ラニオン財団の癌研究奨励金により、米国ウイスコンシン州立大学マッカアドル癌研究所のHoward M.Tennin教授の研究室に、ポスト・ドクトラル・フェローとして留学」

ダモン・ラニオン癌研究基金財団から癌研究者奨学金を授与され、留学が決まった。

11)「培養細胞を用いて、ウイルスの増殖を定量的に測定する方法を具体的に伝授される。」

12)「血清中に存在する、培養細胞の増殖促進因子の単離、

とその精製。」[MSA:multiplication stimulating activity の命名]

13) Temin 先生がノーベル賞を授与された。

14) Temin 先生と夫人とが来日され、お別れパーティを小生が開いた。その時の実に傑作なエピソードが残された。

色々な所で講演やインタビューなどで極めて密なスケジュールを終えて、ゆっくりと土産物を買ったり、好きな『浮世絵』も買いたかったので、案内して欲しいということで、丸善や紀伊国屋に行ったり、伊東屋で探していた丁度のもが手に入り、ご満悦となった。ミセスの買い物は、娘たちに頼まれた真珠のネックレスが目標であった。夕刻に予定していた『お別れパーティ』が池袋のサンシャインビルの最上階にある中華料理の『摩天楼』であつたので、ビルの中にある装飾店の『』に行ってみた。既に『幹根』には言ったが思うようなものが無かつたということなので、丁度よいと思つたが、なかなか御氣に入る物がなく、あれやこれやと吟味していた。Temin 先生と小生はその間、手持ち無沙汰であつたので、奥の椅子に座って待っていた。結局、これといったお氣に入

りの品が無く、諦めて店を出た。会場の円卓に着き、極く親しかった関係の十名程の方達をお呼びしていたので、和氣藹々のくだけたパーティであつた。その時である。昌子の突拍子も無い、悲鳴に近い声と同時に、ミセス Temin のこれまた驚嘆の声が会場に響いた。いったい何が起つたのか、一瞬緊張した。Dr.Temin も一瞬驚いた顔をして二人を見た。次の瞬間全てが判つた。なんと、ミセス Temin の首に、値札のついた高価な真珠の首飾りがあるではないか。あれやこれやと商品を吟味して、全てお返ししたつもりが、首に掛けていた首飾りをウツカリ忘れてしまつたのだ。そのまま店を出てきたのに、店の人も氣が着かず、済まして出てきてしまつたのである。さあ、そのときの Professor Temin のはしやぎ様は無かつた。『あーっ、そこにドロボーがいる!!』『ボリスが来たぞーっ!!』大喜びである。こんなに大声で喜んだのは、ノーベル賞の授賞よりも、以上では無かつたのじゃあないだろうか。皆大笑いであつた。昌子とミセス Temin は急いでお店に返しに行き、無事、事は収まつた。宴会は一気に楽しさを増して、盛り上がつて行つた。しかし、これが、小生にとって、彼の最後の姿となつてしまつたのである。なんとも悲しく、慚愧に耐えない思ひである。

絹の話(77)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

絹鳴り、衣ずれ

絹の織物やニット、組紐など手で強く握ったりするとキュツ、キュツと音がする事があるのを経験された人は多いと思います。

また、絹の帯を解くときシュ、シュ、シュ、と云う音を聞いて艶かしさを感じた方もいらっしゃると思います。どちらも耳ざわりの良い日常では聞き慣れない音です。

絹鳴りは絹の繊維が互いにきしみ合つて発する周期の異なる複雑な振動で、人の耳に音として聞こえるものと、ルルル…、ククク…というような超低周波を指先など皮膚で感じる両者が重なったものです。

音を肌で聞くとはこの様な事でしょうか。

同じような現象は片栗粉を強く握った時や新雪を踏みしめた時にも起こります。

この現象は密着した絹糸に力が加わって少し滑る状態の時発生する振動音です。

ただ、どんな絹でも絹鳴りが起こるかという点、そうではありません。日常では絹鳴りがしないものの方が多いと思います。

絹鳴りのする絹糸はよく精練（生糸についているニカワ質を取り除く―お米でいう精米）されて糸の表面がツルツルなっていて繊維どうしがピッタリくっつく状態で、僅かに残留して脂肪酸に分解された精練剤が繊維の表面に膜を作り、それが繊維どうしをくっつきやすくして、しかも固く仕上がったものに限っています。

この事を利用した物に琵琶や琴三味線の弦があります。現在の練習用の弦は化学繊維が主流ですが、正式な演奏用は今日でも絹糸を使います。

絹弦のウイークポイントとは時々切れる事です。

さらに、絹の弦糸を作るにも大変なこだわりがあります。一番良い音が奏でられるのは琵琶湖の近くの余呉湖の水を使つて作られた絹糸が最高だそうです。

耳で聞こえない肌で聞く音が有るのでしょうか。

古物の琵琶の修復などには余呉湖の糸に限るといわれています。日本では絹産業が衰退して行く中で余呉湖の畔で絹弦生産者が健在だそうです。

文化の伝承、保持、保存、文化財の管理修復などもこの

様な人々の営々とした努力による所があつての事です。

最近絹糸に勝る美しい音色が出る弦が発表されました。

それは蜘蛛の糸です。聞く所によれば弦に蜘蛛の糸を使ったバイオリンの音は何ともいえない音色だそうです。今までバイオリンの善し悪しはバイオリンの本体の作りによるものでしたが、今後は弦の素材も検討される様になるでしょう。

衣ずれは絹の布と布の表面が激しくすれ合う音で、絹鳴りと同じ様に思われますが、それぞれ違った振動音です。

絹糸は家蚕ではお握り型、野蚕では扁平や台形などをした繊維で、しかも蚕から吐糸される糸は始めは太くて次第に細くなる不均一なものです。絹織物は目には定かに見えませんが、絹糸はお握り型繊維なので顕微鏡で見ると凹凸が多い、思ひのほかざらざらした繊維です。

したがって織物の組織、密度、すれ合う方向、すれ合う速度などで、衣ずれの音はそのつど音の感じが違います。それは音の振動波形や振幅が違ふからです。

和服を着てさつさと歩いている人からほんの僅か裾さばきの音が聞こえて来るのもなかなか趣があります。

絹を洗濯して干すとき二重織の物など地の目を揃えようとたてよく引くと重なつた二枚がシユ、シユと音を發します。

これも衣ずれの音でしょう。

絹は摩擦に弱い

よく精練された艶のあるしなやかな絹の泣き所は心地良い絹鳴りや衣ずれはするが、他の繊維と比べて摩擦に弱い事です。

蚕から吐糸された1本の糸は2本の細い糸が合わさつて出来ています。この細い糸はさらにそれぞれ1000本の極細い糸で構成され、この1本1本が900本の超細繊維が撚りの無い状態で縦に連なっているのです。

縦の1本1本は同じ太さなら鋼鉄より強いといわれていますが、摩擦が続くと1000本の束がすこしずつ緩んでは立ちが起き、衣類にすると裾や袖口などがけば立ち易いのです。

絹を水でもみ洗いと、絹は親水性繊維なので固く束なっている1000本の束を水が緩めてしまい、けば立ちやすくなりますので、押し洗いをお薦めします。

今日ではそのようなけばだちを防ぐため1000本の束の中や糸の表面に樹脂加など施しけば立ちを防いでいる物もありますが、絹特有の光沢や風合いが失われてしまいますので二長一短あります。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

六十七回

「月虹」 鯨島 満

十九 木下孝一 3

【訂正】 本誌一月号四十八ページ「木下孝一 1」の下段に、大石田で詠まれた他の二首とともに「歌碑ここに在りと尋ぬる寺庭の落葉だまりにかたくりの咲く」を虹ヶ丘での作と書いたが、この一首は茂吉の第三の墓のある乗船寺での作である。

引き続き「茂吉のふるさと」の歌を読んでゆく。

コスモスの花乱れ咲く庭ありて茂吉の生家カーテン
閉ざす

金瓶の村にけふ来て桑の木をまして蚕かぐやのねむりなど
見ず

茂吉の生家を旧金瓶村に訪ねたときの作。一首目の下句には、茂吉が育ったところにはカーテンはなかっただろうという思いもあるだろうか。

二首目からは「死にたまふ母」（『赤光』）の「桑の香

の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり」「母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蚕かぐやのねむり」（大正二年）を心に置いて詠んだことがわかる。

月山遠く蔵王を近く望みつここに沈黙の茂吉あり
けむ

『赤光』の「死にたまふ母」思へらく葬り道べに草
は長けたり

同じく金瓶での作。一首目。茂吉にとって朝夕眺めた蔵王は父なる存在であり「死にたまふ母」では「蔵王山に斑まだら雪かもかがやくと夕さりくれば岨しづみゆきにけり」と詠み、戦争中の疎開先金瓶から大石田に移居したときには「朝な夕なこの山見しがあまのはら蔵王の見えぬ処にぞ来し」（『白き山』昭和二十一年）と詠んでいる。下句は、疎開先で第二次世界大戦の敗戦を知って詠んだ「沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそぞぐ」（『小園』昭和二十年）にまで思いを馳せたことを思わせる。

二首目は「死にたまふ母」を読んでまず思うのは田の傍らにしつらえた焼き場への道、そして母とともに焼けた野の草であるが、今はそのあたりには草が茂っているというのである。

冬の日も蚊帳を吊りける茂吉大人空気動かぬしつけ

さに居し

同

聴禽書屋の庭の象徴そびえ立つ桂大樹は白雲を呼ぶ

ここからは、金瓶から移居した大石田を訪ねたときの歌に入る。一首目。茂吉は空気のうごきに敏感で、「しづけさは斯くのごときか冬の夜のわれをめぐれる空気の音す」（『白き山』）と詠むほどであり、また、冬の火鉢も赤い火が見えないように灰を被せたという。これらのことは、身辺の世話をした板垣家子夫やその金子子阿岐夫など多くの人の証言がある。

二首目。茂吉が住んだ聴禽書屋の庭にはかつて大きな桂の木があり、茂吉も「この庭にそびえてたてゐる太き樹の桂さわだち雷鳴りはじむ」「四百年の老の桂樹うつせみのわががたはらに立てる楽しさ」と詠んでいる。

乗船寺のここにも茂吉の墓ありて尾花の陰に踏む石の段

同

乗船寺は茂吉と直接の関わりのない寺であるが、茂吉の門弟結城哀草果・板垣家子夫、茂吉の長男斎藤茂太等の思いによって、ここに東京青山、金瓶に次ぐ茂吉第三の墓が建てられたのである。また、板垣念願の歌碑も建てられることになり、茂吉の「逆白波」の語のヒントを語ったとされる板垣の願いで、「最上川逆白波のたつま

でにふぶくゆふべとなりけるかも」が選ばれたといういきさつがある。本稿の冒頭【訂正】の中に引用した歌は木下孝一がその歌碑のことを詠んだものであった。

藁沓を履ける茂吉が最上川辺歩みしは六十余年のむかし

同

大石田での茂吉は最上川辺をよく散歩した。『白き山』は最上川を詠んだ歌集と言えるほどである。茂吉の散歩の出で立ちは藁沓を履き棧俵を抱えていた。茂吉が最上川を詠みはじめたのは昭和二十一年であるから、右の歌を詠む時を遡ること六十余年だというのである。昭和二十一年、茂吉は大石田に移るとすぐに床に臥し、春過ぎにようやく動くことができるようになった。その最初のころの最上川辺散歩の歌は「逝く春の朝靄こむる最上川岸べの道を少し歩めり」であった。

団栗の散りぼふを踏みて上り来つ「虹の断片」の歌碑立つ丘に

同

「最上川の上空にしてのこれるは未だうつくしき虹の断片」を刻む歌碑はもと薬師山と呼ばれた虹ヶ丘に立つ。ここからは蔵王が遠望できて茂吉が最も好んだ場所であった。

楽しい時間 53

山本紀久雄

2017年2月28日

三遊亭円朝像…その二

東京国立近代美術館のMONATコレクションで、鐫木清方（1878～1972）が描いた「三遊亭円朝像」の実物をはじめて見て、その解説に「清方はこの手法によつて『文字に依らない伝記』としての肖像画に新しい領域を開きました」とあり、日経新聞（2016年12月18日）の「美と美落語の楽しみ 上」で、中沢義則記者は「この絵は全体を網羅的に適切に表現しており、これに同感である」と前号で紹介した。

だが、筆者は眼差しが気になった。それは「三遊亭円朝像」の目つきが上向きなことである。高座姿なのであるから、落語一席を語る場面を描いたものであるのに、視線が観客に向いていない。講演などでもそうだが、語り手は聞く側の反応を見て対応していくもの。だから、常に観客・観衆を意識しているから、会場内を見まわして手ごたえを探ることになる。

その点、円朝の眼差しは会場内を意識していないように見える。多分、清方はこの目つきを最も強調したかったのではないかと推察したい。

つまり、円朝は観客・観衆の反応などは測る必要がないのではないか。熟達した名人の境地に至っている円朝、自らの語りに入り込み、そこから繰り出す言葉の数々、それを信じて断を続ける。そのためには視線を会場内遠く全体に見据えるところに置く。そこを円朝と旅したほど親しかった清方がしっかりと見抜いていたのであろう。

いずれにしても、清方が50歳代の円熟した「三遊亭円朝像」を描き、その筆致が伝える強烈な印象は、近代肖像画の代表作として高く評価され、昭和5年（1930）作であるから、まだ100年経過していないのに重要文化財として指定されている名画である。

日経新聞・中沢義則記者は記事の最後に「落語家の始祖」に触れている。《「落語家の始祖」と称されるのは安楽（あんらく）庵（あん）策伝（さくでん）で、美濃に生れた僧侶だ。茶人、文人でもある教養人という》『「醒睡笑（せいすいしょう）」と名付けた笑話集を編んだことから落語家の始祖の名が付いた。京都の警護などを司る京都所司代に話を聴かせたという。』

「醒睡笑」は元和9年（1623）に完成したとされる（1628年の説もある）。世間に流布する1039編の「笑える話」や「面白い話」を集めた大著で、「子ほめ」など落語の前座断の原型のような話も収録されているという。

策伝の肖像画は本人が第55世法主をつとめ、菩提寺でもある京都の浄土宗、誓願寺にある。策伝を顕彰するため、1967年に始まった策伝忌に合わせて描かれた。原画は江戸初期の学



僧で書画家の松花堂昭乗作「安楽庵策伝像」。袈裟をまとい、引き締まった理知的な風貌で優しそうだけれど、おかしみのようなものは伝わってこない。

策伝は、飛騨高山城主金森長近の弟として出生、7歳の時に美濃浄音寺で出家、11歳に上洛、その後各地の寺にて修行、43歳に美濃浄音寺25世となり、60歳で京都大本山誓願寺法主(55世)となる。62歳から「醒睡笑」起筆し、70歳の元和9年に完成させ、誓願寺塔頭竹林院をつくり隠居、境内の茶室・安楽庵に入り、以後、自らを安楽庵と号した。

寛永19年に没するまでの19年間、竹林院を訪れる風流人は絶えなかった。松花堂昭乗、小堀遠州、烏丸大納言光弘、木下長嘯子、松永貞徳、金地院崇伝、近衛信尋等々当代各界一流文化人との交流が続いた。

ところで、日本では古くから咄は発達していて、太古時代には口から口へと語り伝えられる語部がずっと続き、中古には咄職に類したものが別に存在したかもしれない。

『古事記』にも既に語源説的な洒落が見られ、続いて『竹取物語』『伊勢物語』が笑話の要素を持ったものが古く、以後、歌物語——諺物語——狂歌咄——落し咄とつながり、この「落し咄」がはじめてできたのが策伝の「醒睡笑」である。

ところで、室町時代には同朋(どうぼう)(注 足利将軍に近侍し取次・お伽などの役に当たった者・広辞苑)がいて、戦国時代には「御咄の衆」「御伽衆」と呼ばれる人々がいた。

「御伽」とか「御咄」とは、主君に対する敬称で、「伽」とは「人が加わる」こと、人が大勢集まるを意味する。人が集まれば「咄」が出る。「伽」をするのは多く庚申侍とか武士ならば夜警等であり、「伽」を遂行するには「咄」を必要とし、これが「御咄の衆」とか「御伽衆」を発生させた。

桃山時代以降は、「御咄の衆」は咄上手で古老又は教養、地位等実力ある人物を言い、単に咄上手で芸人である人物を「御伽衆」と呼んで区別した。

戦国時代の「御伽衆」は、神官、僧侶、検校、宗匠等が大部分占め、咄そのものはさしたる巧者もいなかったと推定される。しかし、桃山時代に入ると秀吉の趣味と相俟って俄然茶人が「御咄の衆」として著しく台頭してきた。

また、この時代の仏教のあり方も注目する必要がある。動乱の時世、布教は難解な教義より、娯楽的な要素を持つ絵解風教学が採られ、これがまた話術の訓練を促した。

この事象下、策伝が持つ深い仏教理解を背景に、洗練された弁舌の冴えによる滑稽諧謔談、加えて、風刺、教訓、啓蒙的要素も入れ、そこに咄の落ちを重要視する語り、これが秀吉や板倉重宗に招かれる「御咄の衆」となり、そこで語られたものが「醒睡笑」に収められていき、「落語家の始祖」名が付いたのである。

このように安楽庵策伝という不世出の話術者が出現すること、日本芸能史に新たに「落語」というジャンルが生れ、「醒睡笑」の完成をみた元和9年を落語の成立年といわれている。

策伝は、大本山誓願寺法主大僧正日快策伝上人という高い地位を得ていた。だが、策伝はその位から想定される「学徳兼備の高僧」ではなかった。あくまでも人間味豊かな大人物であり、時代の現実実態を見つめつつ、そこに笑いの落ちを付け加え、人々を惹きつけていったことが、「醒睡笑」の果実となつて、今日まで続いている落語を誕生させたのである。

落語がこのように盛況となつている始まりは策伝からであるが、その後はどのような系譜で円朝までつながってきたのだろうか。これについては次号としたい。

漢詩研修 (六)

千代田岳精会 平井茂行

春夜洛城に笛を聞く
しゅんやらくじょうふえきく

李リ

白く作

誰が家の玉笛か暗い声も飛ばす
たがいえきぎょくてなあんこえとばす

此の夜曲中折柳を聞く
このよさぐちちゅうせつりゅうをきく

散じて春風入る洛城に満つ
さんじてしゅんふうにいらくじょうみ

何人が故園の情を起さざらん
なんびとこえんじょうをおこさざらん

【作者】

李白（七〇一～七六二）字は太白、号は青蓮居士。西域の碎葉（キルギス共和国のトクマク）に生まれ、五才のころ一家と共に蜀の青蓮郷（四川省江油県）に移住した。父は富裕な商人で、西域との交易を営んでいたという。李白は幼少のころより十分な教育を受け、優れた文才を発揮したが、十代の中頃より自由への憧れを抑えかね、任侠の徒と交際したり、知り合いの隠者たちと山にこもったりした。二十五歳前後に蜀を離れ、長江中・下流域を探訪、二十七歳ごろ安陸（湖北省）の許氏の娘と結婚し新居を構えた。四十二歳の時玄宗の朝廷に召されて翰林供奉（詔勅や詩文の起草に従事する官）となった。しかし豪放な言動が多く、わずか二年後、讒言によって長安を追われた。以後はまた流浪の身となるが、すでに大詩人として名が知れ渡っていたため各地で歓迎された。追放直後には杜甫と初めて出会い、高適も交えてしばらく行動を共にしている。七五五年安祿山の乱が起ると永王李璘（玄宗の第一〇子で肅宗の弟）に招かれ、その幕下に入った。

【語釈】

○落城…洛陽の街（今の河南省洛陽市で、唐の時代は西都長安に対して東都とも云った）○玉笛…美しい笛、立派な笛 ○暗に…ひそかに。どこからともなく。誰が吹くともわからずの意 ○声を飛ばす…耳に聞こえてくる。笛の音が風に吹かれてくるので「飛」といった ○散じて春風に入って…笛の音が春風に乗って響き渡ること ○折柳…「折楊柳」という曲名。別離の時に奏でる曲。旅立つ人を見送るとき、楊柳の枝を折ってはなむけとする習慣があった ○故園…故郷

土への思い

夏目勝弘

帰りの電車まで時間があるため、本屋に入る。買う予定の本があるのでもない、並びいる本の背の書名のみを見て行く。

(日本の土、山野井徹著・築地書館)の冊に目が止まり、ためらわず買う。

今は歩くのみの運動しかできない。歩くたびに思うことは、土の道が少なくなつたこと、昨年の秋三輪山を登拝したのが久しぶりだ。

今朝も田中の道そして山沿ひの道、山のなかの毛物道のような所まで簡易舗装されている。

墓地のある所は埋葬地があるため土であり、土は赤土で粘性がある。土葬を願っていた人が亡くなつた時などは、穴を掘らなくてはならない、四人ほど掘つたことがある。

土については多くの思いが湧いてくる。長塚節の「土」の勸次が開拓をしたように、自分も赤土の原野に唐鍬を打ち込んだ、赤土が刃先に付き、腰に差してある竹へうで落しつ少しも進まなかつたことが思に残る。

生まれてより住みつづけている台地は、縄文晩期の人々が生活していた所でもある。

縄文文化は約一万年続いている、一つの文化が二万年も続いたことは世界に例がない。

その文化の特徴は、食料の調達方法が「狩猟・採集」という方法のままである。

土器が出土するということは、定住の始まりであり、狩猟・採集を続け、世界で最ともあとまで農耕段階に移行しなかった。(日本の土より)

縄文人が狩猟や採集をしたように、小学生の頃より三月にな

れば白鰐が釣れ、ウグイの大群が遡上してくる。六月にはアユが、落アユのシーズン、岸で待つていればアユが飛び出て来るのを拾うのみである。

採集はフキノトウ・ワラビ・ツクシ・ゼンマイが、秋はアケビ・ムクの実、そして茸等忙しいほどであった。

マツタケは日の出前に家を出て自分のシロを回れば金が稼げた。縄文人と同じような生活をしてきたが、今ではもう出来なくなつたことの方が多。

いま住んでいるこの台地の土が黒いのは何故か、このごろ気になつていたとき「日本の土」を読み、ようやく解決できた。

それによると縄文人は、食料の確保のための原野(疎林)作りであると考え、それが野焼き、山焼きによって食料となる、ワラビ・ゼンマイが多く採れる場所を得るためだ。今でも山形県小国では野焼きをしている。

良質なゼンマイ・ワラビが採れ出荷しているという。

山焼きは現在でも、若草山・秋吉台・阿蘇でおこなつてゐる。

表土の最上部にあるクロボク土は、火山灰ではなく堆積物中の微粒炭が腐植したもので、縄文期の野焼き・山焼きで発生したものの考えに至るとある。

夏休みなどこのクロボク土を掘り遺跡の発掘に費やした。そこから出土した大きなカメ等にも火をかけたと思われる跡が残つていた。土が黒くなるには、野焼き等のみでなく多くの細菌類の力が必要となつてくる。

腸内細菌と土壤細菌の多くが共生菌の系統にあることは、おそらく偶然の致ではない。

いずれの場所でもそこにいる細菌は、死んだ植物質を分解することに特殊化している。(土と内臓)微生物がつくる世界、片岡夏実訳、築地書館)より。千年以上つづいている若草山の山焼きの黒土を確認しに行く予定。

「氷魚」のことから（195） 岡本八千代

何となく、スマートでない名前だなあーと思いながら私の籠り部屋、「木槿庵」に来て、漱石の「木屑録」のことを書くようにする。子規と漱石の男同士の仲のよさ、さりげなく言ったり書いたりするユーモアのある手紙など、これは一体どこからくる友情なのか。

今回も、高島俊勇著「漱石の夏やすみ」の力を借りて、まず「木屑録」の構成から考えてゆきたい。

私の持っている復刻書は昭和五十六年三月二日、岩波書店版である。今、私の机の左側に静かに置いてある。

・漱石は文章がひとくぎりつくつくと改行している。改行個所までがひとかたまり。

・全体で十六のかたまり。これを章とよべば全十六章になる。

・八章までは、房総旅行およびその前後の種々のこと。——かに第一部とよぶ。

・（諧謔の気分のものが多いが、興津と保田とを対比した第四章、および絵よりも実景のほうがいいことをのべた。第五章はそうでない）と。

・第九章から第十五章までは景観の描写が系統的にならぶ。これを第二部とよぶ。

・第一部が序、第二部が本篇と考える。（このうち第十二章は漱石がもっとも尊敬する友人米山保三郎について述べたも

の。なぜこの文章をはさんだのか？

・子規も米山をよく知っていて、二人は米山のこと尊敬し思っていたからか？

・保田周辺が、第九、十、十二、十三の計四章。小湊周辺が第十四章。第十五章は、小湊以後の詩五首を並べたのみ。

・第九、十、十二、十三、十四の五章が木屑録の中心。

・第十六章はあとがき——これを第三部に。

・以上三部第十六章の構成。

ここから、その内容を略記してみる。

第一部

第一章…子供の頃から文章をつくるのが好きだった。英語の勉強のため放棄。明治二十年富士山にのぼり、今年七月興津へ行ったが作品は無し。八月房総に旅行し木屑録できた。

第二章…舟で房総へむかう途中、帽子を風に飛ばされた。

第三章…房総では毎日海水浴をしたこと。

第四章…興津の景は温雅で、保田の景は陰悪である。

第五章…風景画に憧れていたが、やはり実際のほうがいい。

第六章…友人四人といっしょであったが、やつらはみな俗物であった。

第七章…ある夜、数年前に家にあつて勉強していた時の思い出。

第八章…旅先で子規からの手紙を受けとった。家に帰ったらまた手紙がきていた。（次回へ）

ことのはスケッチ (458)

今 泉 由 利

「私の短歌」

『時習館かんさい31号』への原稿。

「持統上皇、二河行幸」の際のご詠歌と万葉集にある『引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに・長忌寸意吉麻呂』

この地に私のルーツはあり、父・今泉忠男（御津磯夫）の「引馬野の考証」に、斎藤茂吉先生が、現地調査にお出かけ下さったこと。

土屋文明先生、アララギの先生方が「三河アララギ」の歌会などにご出席下さったりしたこと。

私の身のまわりが短歌であることが普通の環境に育った。長じて、日本から一番遠い所へ行ったら、自分はどうのように生きるのだろうか……アルゼンチンが充分に遠かったから、行って住んでみた。

外国に居たその時々、短歌と随筆に託し、月々の「三河アララギ誌」に送り届けるのだった。そして、自身がいかたに日本のことを知らない、何もかも知らないことを思い知った。

「父母をサポートしなくては」と思う時点で日本に帰り、日本を知ろうとする。

日本の一番始めの和歌とは。「天照大神」を知りたい。「古事記」を読もうとし。神々の記述に挫折。

「ドナルド・キーン著。日本文学の歴史①古代、中世篇、日本の創造（紀元前六六〇年）」よりお教えいただく。

○三人の神が、高天原に出現するところから始まり、様々な神が誕生し、島々が生まれ、最初の英雄、イザナギとスサノオノミコト、スサノオの姉アマテラス。

アマテラスは、水田で稲を育て、織を織る。残酷で怒りつぽりスサノオの仕業に怒るアマテラスは岩屋に身を隠す。世界は暗となり、太陽の必然を知り、農耕、豊穡への母なる女神、天照大神の記録された日本のはじまり。

岩屋から、天照大神を誘いだした「スサノオ」は、大蛇を退治するなど英雄になってゆき、スサノオが花嫁に宮殿を建てるとき詠んだ和歌。

「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」

○太陽の女神、大地母神、そのうえ武力、軍事力へのパワーも備え、日本最高神と君臨された天照大神。霊石山へ行宮され、朝日に輝く樹水を詠まれた二千年以上時を経た和歌。「あしひきの やまへはゆかじ しらかしの すえも たははに ゆきのふれしは」

○神武天皇（第一代天皇）の東征は、日向高千穂より、天下平定のため、筑紫、阿岐、吉備を経て、瀬戸内海を東へ進み、明石海峡を浪速の白肩津に到着。

戦い、迎撃、滅ぼし、苦闘を経、大和平定に至り、畝傍の橿原宮で即位され、日本の紀元元年となった。大和平定の戦闘の和歌。「神風の 伊勢の海の 大石に 這ひ廻るふ 細螺の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ」

「みつみつし 久米の子等が 粟生（粟畑）には 葦一茎そねが茎」

つづく

編集室だより【二〇一七年二月】

○編集室に籠り、調べたり、書いたり、描いたりしていることが多いから、筋肉トレーニングには出掛ける。

編集室からジムまで徒歩。筋トレ後の帰途は、飛鳥山に登り、山の向こう側に降り、買物、用事などを済ませ、別の山権現山の、かつて頂上あたりだったであろう家に帰る。約七千歩ほどの行程を日常にしている。

筋トレのマシンに取り組む「ジム」の壁面に、健やかに生きるための心掛けが表示してあり、今週は「マザー・テレサの教え」でした。

- ・思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。
- ・言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。
- ・行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。
- ・習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。
- ・性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから。

マザー・テレサ女史と、私のアルゼンチンの母、セリーナ・アラウス・ペラルタ・モス・デ・ピロバーノさんは、共にナースとして世界の人。一緒にマガジン誌の表紙^①になつておられたことがあった。

○「山崎青樹先生を囲んで」和食会にゆく。学生時代が戻っ

た気分、テキスタイル関係の超専門家の、それぞれを極められたお話を伺い、「こんなに沢山の知らなければいけないことがあった。」自身に過ぎた年月に目がさめた。

○豪徳寺、松陰神社へ吟行。

参道の松並木にまず驚く。紅梅が咲く、白梅が咲きはじめる。水仙が咲く。春になろうとしている空気を胸いっぱい。三重塔の初重に親猫と仔猫2匹。二重には、蓮に座った阿釈様の下で、白猫が右手をあげ、玉で遊ぶ親子猫。なんとほえましい塔。井伊家の墓地側には、供花ひとつなく、寒かった。学徒が祭神ということにびっくり、松陰神社。

○次の吟行予定地へ下見にゆく。句会場の、和洋折衷の山本亭の建物に昔を偲び、うれしくなる。帝釈天の題経寺と江戸川堤と、矢切の渡し。この日の冷たい風も、吟行当日には、輝かしい春の日になるだろう。

○地藏菩薩

ボランテアに行く日と重なってしまったり、遅遅と進まない。ほとんど被害妄想になりながら、病気の友人の無事を、世界情勢を、沢山の心配^②を…お話しながら彫っていた。檜角材の、どこからどこまでも付き合…急に、地藏菩薩が私のところにいらして下さった。悲しみを秘めておられるようなご様子になってしまい…ごめんなさい。

野菜の花（10）

鈴木孝雄



○ キュウリ

黄色の5弁の花は夏すずみという品種のキュウリの雌花。キュウリは同じ株に雄花と雌花が別々に咲く。写真の花は雌花とすぐ分かる、花にはもう小さな実が付いているからだ。お恥ずかしいながら数年前まで、キュウリは雄花の花粉を雌花が受粉して実が出来るものと思っていた。だから、雄花に蜂がやって来て、次に雌花に行くのを歓迎して見ていた。

写真のようにやっと咲いた花にもう実が付いている。最近の殆どの品種は受粉が必要なく、この特性を専門用語では単為結果と言う。実に味気ない用語、英語ではparthenocarp、語源はvirgin fruit、この方が分かりやすい。

単為結果から出来た実は無核果、従って種無しだ。キュウリが大きくなり種が邪魔になったなどは昔の話。品種改良によってキュウリは種無しばかりでなく、イボ無しで皮が柔らかく苦味が少ないサラダ向き品種が普及した。

キュウリ栽培は比較的容易だが、実を真っ直ぐに育てるのは苦労する。蔓を曲げたりするとすぐに曲がってしまう。灌水の影響も受けやすく、実に繊細な性格だ。市場に出ているような真っ直ぐなキュウリを育てる農家さんにはとても敵わない。

それでもキュウリ栽培が楽しみなのは、早朝に穫れたての実をそのままかぶりついた時の音と瑞々しさだ。

キュウリ栽培で最も厄介なのはうどんこ病。伝播性が高く、隣の畑に発生したらまず諦めざるを得ない。高価だが、うどんこ病にかかり難い接木苗を私も求めるようになった。

今回はパクチーの花の予定です。

お知らせ

△五月号の原稿は、三月三十一日（金）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アラギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アラギ」について

◇三河アラギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六三二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができ
ます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アラギ発行所・〒一一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・(〇三) 五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美